

だのに、国や市も何もしようとしないんですから」

●日本で唯一アスベストを使用していなかった屋根材製造会社

天然鉱物であるアスベストは、熱や摩擦に強いことから、断熱材、屋根のスレート材、ブレーキパッドなどに多用されてきた。

だが、その繊維の細さは頭髪の5千分の1。大量に吸い込むと肺の奥に刺さり、平均30年以上をかけ肺がんや中皮腫(肺の周りの胸膜などにできる腫瘍)を引き起こす。実際、今年年間千人以上が中皮腫で亡くなり、その危険性から、2006年からアスベスト製品の使用は全面禁止された。

建物解体によるアスベストの排出は2020年から2040年にピークを迎える(予測)が、今回の地震と津波は被災地に数十年分のアスベストを一気に吐き出した。

高橋社長は「弊社はおそらく、**日本で唯一、屋根瓦や屋根材にアスベストを使わない会社**です」と自負する。理由がある。1970年開催の大阪万博のパビリオンの屋根工事に、知人の職方が約10人出張した。だが95年、全員が、咽頭ガンや肺がんと診断された。職方たちは普段はアスベストを含まない天然スレート材を使用していたので、万博工事で大量のアスベストを吸い込んだと推測される。

その危険性を国民が知ったのは05年。アスベストを扱うクボタ社とニチアス社の多数の従業員と周辺住民の死亡が判明したのだ。

「私の親友も昔、クボタの下請けで働いていました。毎月電話で話す仲ですが、一昨年の正月に声のかすれを感じ、3ヵ月後には咳き込み出したので『病院に行け!』と受診させたら、中皮腫でした」

人を殺すまい。この理念からアスベストを使用しなかった。だからこそ、津波の直後、高橋社長は市長や市議会議長に「徹底したアスベスト対策」を訴える陳情書を提出した。アスベスト濃度の測定、建物解体時のアスベストの分別と回収、従事者には、原発作業員のように白ずくめの服と電動ファン付きのマスク着用の徹底、住民をむやみに被災現場に近づけないよう要請した。要請書には、ボランティアでもいいので調査に協力するとの、早稲田大学の3人の教員の連名も裏書されていた。だが――。

「梨のつぶてです。誰もそんなこと守ってない。たとえば、**アスベストを使った建材から釘を一本抜くとします。これだけで2万本のアスベストが飛散する。それを風邪用マスクで防げないのに**」